第42回モスクワ国際映画祭 正式出品
第2回江陵国際映画祭 オープニング作品

椿の庭

監督・脚本・撮影　上田義彦

椿の庭のこと

あの日、僕が住んでいた家の近くの道をいつものように歩いていたら、見覚えの無い空き地に足が止まった。まわりを見渡しはっとした。

あの家が無い。穏やかな静寂に包まれていた古い家。優しい木漏れ陽を歩道に落としてくれていた大きな樹が跡かたも無く消えていた。目の前の空っぽのごろごろとした土くれに覆われた地面と、いくつかの切り株の跡をただ眺めていた。

そして想った。ここに暮らしていた唯の一度も、姿を見かけたことも、話したこともない人のことを。こんもりと繁った木々に隠れて静かに建っていた、小じんまりとして好感のもてた家のことを。

落ち着かない不思議な喪失感に占領されながら帰り道を急いだ。家に着き自然にペンを取った。庭では椿の花が木いっぱいに咲いていた。

15年前の春先。あの日この映画が始まった。

上田義彦

富司純子
沈恩敬（シム・ウンギョン）
田辺誠一　清水綛治
張震（チャン・チェン）特別出演
鈴木京香

©2020 "A Garden of Camellias" Film Partners

HP bitters.co.jp/tsubaki
Twitter : @TSUBAKI_NIWA
Facebook : TSUBAKI.no.NIWA

富司純子　沈恩敬（シム・ウンギョン）
田辺誠一　清水綛治
内田淳子　北浦愛　三浦透子　宇野祥平　松澤匠　不破万作
張震（チャン・チェン）特別出演
鈴木京香

エグゼクティブプロデューサー：小佐野保、畠中鈴子
プロデューサー：橋本竜太、小川真司、宋姈信
協力プロデューサー：飯田雅裕

音楽：中川俊郎

撮影補：佐藤治　照明：八幡高広
録音：橋本泰夫　助監督：中山権正
衣装：伊藤佐智子
ヘアメイク：赤松絵利、吉野節子
編集：上田義彦
スクリプター：河島順子、田口良子
整音：野村みき
アシスタントプロデューサー：萩原里枝
配給協力：江守徹
音楽プロデューサー：ケンタロー
宣伝美術：葛西薫
製作：ギークピクチュアズ／
yoshihiko ueda films／
ユマニテ／朝日新聞社
配給：ビターズ・エンド
制作プロダクション：ギークサイト

2020年／日本／128分／5.1ch／
アメリカンビスタ／カラー

「もし私がこの家から離れてしまったら、ここでの家族の記憶や、そういうもの全て、思い出せなくなってしまうのかしら」

富司純子×沈恩敬（シム・ウンギョン）ほか、豪華俳優陣が紡ぎだす、「生と記憶」の物語。

草木を愛でながら、長年住み続ける家を守る絹子を演じるのは日本映画界を代表する女優 富司純子。また絹子の娘の忘れ形見である孫娘の渚には、『新聞記者』で日本アカデミー賞最優秀主演女優賞受賞の沈 恩敬（シム・ウンギョン）。さらに絹子のもう一人の娘・陶子を鈴木京香が演じ、三世代の女性の生きざまをたおやかに表現。そこに見えてくるのは世代それぞれの、儚さ、美しさ、内面の強さだろう。そこに張 震（チャン・チェン）、田辺誠一、清水紘治ら男優陣の陰影の深い演技が、味わいを添える。

限りある「生」とは？　残った「記憶」が我々にもたらすものとは？　忙しさの中で見落とされがちなそれらに一筋の光を当てながら、本作は人生のほんの些細な、なんでもないところにこそ真実がひそんでいることを描き出す。

写真界の巨匠、上田義彦が満を持して描く、かけがえのない瞬間。

サントリー、資生堂、TOYOTA など数多くの広告写真を手掛け、その卓越した美学で人々を魅了し国内外で高い評価を得ている写真家 上田義彦が、構想から十五年の歳月をかけた渾身の一作。

常にアナログのフィルムにこだわり、移ろいゆくものの二度とない瞬間をフレームに収め続けてきた上田が、ひとつの家族をテーマに、実際に一年をかけて春夏秋冬の季節と共に描き出した映像は、奇跡としか言いようのない生命感に満ちている。

命あるものは、花も人も、美しく成長するが、いつか最期が訪れる。だが、だからこそ、この映画の一瞬一瞬は見るものの心の中に、人生を慈しむ喜びを気づかせてくれるはずだ。

物語

春

葉山の海を見下ろす坂の上の古民家を移築した一軒家。絹子の夫の四十九日の法要が行われた。法要のあと、東京から参列した娘・陶子は、年老いた母がいまだ、姉の娘の渚と二人きりでこの家に暮らし続けていることが気が気でない。東京のマンションで一緒に暮らそうと勧めるが、絹子は長年家族で暮らした思い出深いこの家から離れるつもりはない、と言う。

よく丹精されたその家の庭では、四季の移り変わりにあわせ、花が変わり、海からの風も変わり、季節を全身に浴びるように感じることができる。今日も近づく夏の気配を感じながら、朝食をとる二人。

梅雨

激しい雷雨に藤棚の花が散り、やがて雨蛙が現れだした頃、渚が家に帰ると、玄関に見慣れない男物の靴が……。絹子は相続税の問題で、訪ねてきた税理士からこの家を手放すことを求められていた。絹子の悲痛な表情に胸を痛める渚。

盛夏

お盆に訪ねてきた夫の友人と、若い頃の思い出話に花を咲かせる絹子。渚は、このところ元気のなかった祖母が久しぶりに見せた笑顔に安堵する。だが、その直後、絹子は過労から倒れ込み、病院に担ぎ込まれる。

そして季節は秋から冬へ… 絹子にも、渚にも、人生の新しい決断の時が迫っていた。